農業者の抑うつ・家庭の悩みと夫婦の伴侶性

篠　崎　正　美
（熊本学園大学社会福祉学部）

Distress/Life Anxiety of Farmers and The Couple's Companionship

Masami Shinozaki

要約：男女農業者の心身の抑うつ状態および家庭の悩みを、性別・年齢別にNFR全国サンプルと比較した。①「厳しい」といわれる農業者の生活実態が、健康面、個人や世帯の収入面で見られることを示し、②つぎに、生産面でも生活面でも夫婦の共同行動や共同理解、共通目標をもちつつ生活することがいわば前提となっている農家で、夫婦の伴侶性の実態を、生産、生活（夕食や買い物）、夫婦間のトラブルおよびケア行動の認知、および夫婦の意思決定パタンの実態において捉えた。これが抑うつ度や家庭での悩み、結婚満足度等とどのように関連しているかを２変数間の関連を中心に考察した。

キーワード：農業者、伴侶性、抑うつ的心身状態、結婚満足度、配偶者のケア行動

１．問題意識

今日、農家をめぐる状況はきわめて厳しい。とりわけ専業農家においてそうである。経済的にはもともと小規模経営が圧倒的多数を占めているのに加えて、米の減反政策や農産物の輸入増加による農産物価格の低迷が、家計収入を圧迫し、他産業従事者との所得格差を生み出している。人間関係の面からは、家業における後継者の不足や後継者の結婚難（いわゆる「嫁不足」）が農家としての存続をおびやかし、ひいては農業・農村の超高齢化の進展や人口急減による崩壊現象を惹起しつつある。[1)]

後者の原因のひとつに、前者があることは言うまでもないが、同時に、農家や農村に内在的な原因として、女性や若い世代にとって性別や年齢による差別的慣習や支配＝従属の伝統的社会関係が、農家構成員個人の自律化やライフスタイルの自由で合理的な選択を阻んできたことが挙げられよう。[2)] その結果、農家生活の民主化のみならず農業経営においても合理化が阻害され、ひいては若い男女の農村流出による後継者不足や結婚難を生起させてきたともいえる。

しかし他方では、農業専業で夫婦を中心に家族経営をがんばっている人たちの間には「農業は夫婦で一緒に働ける良い仕事」という長所も指摘されている。実際に、殆んどの専業農家が夫婦を中心とする家族員の労働によって成り立っている以上、生産面で夫婦がともに気持ちよく意欲と能力を発揮して農業に従事することは非常に重要であり、先に述べた

性差別的・若年層差別的な関係は実際にはそれほどありえないのではないかとも考え得る。生産面においても生活面においても夫婦間の仕事の協同や分担の実質的合理性や、安定と満足度の高い情緒構造が家族経営の前提条件ともいえ、実態として多くの家族関係では、これに向けた戦略なり努力が行われているかもしれない。しかし、これまで、農村の家族関係についてこのような問題に関する研究はほとんど行われていない。

本論文では、ＮＦＲ調査で、「農業を仕事としている」と回答した人々について、①その生活不安や抑うつ度の実態を、性別や年齢の違いに即して明らかにすること、②かれらの家族意識における男性優位性の様相を明らかにすること、③農業者の夫婦の伴侶性を、生産と生活面での共同行動および配偶者からのケア行動の評価において把握すること、以上を通じて、④農業者の生活不安や抑うつ感が、②および③とどのように関わっているのかを考察したい。

２．対象者の属性

ＮＦＲ全国サンプルのうち、本人の仕事の種類が「農林漁業職」で回答した342人を対象者とした。これは全国サンプルの4.90%にあたる。対象者の属性は、男性175名、女性167名で、性別構成比は男性51.2%、女性48.8%で男性がやや多い。

性別・年齢別構成比は表１のとおりで、28～49歳が19.9%（全国サンプル45.5%）、50～64歳が30.1%(全国33.0%)、65歳以上が50.0%(全国21.5%)であり。壮年前期、壮年中期が大きく欠落し、高齢化が顕著であることが示される。しかも、壮年後期である50～64歳が30.1%であり、このままで推移すれば、15年後には担い手層の完全な崩壊が予見される。そしてＮＦＲ農業者サンプルのこの年齢構成は母集団をほぼ反映しているのである。[3)]

家族構成は（表２）、ＮＦＲ全国サンプルと比べ、「三世代家族」「その他」が２倍近く多い。「本人夫婦と子ども」が逆に全国サンプルの半分以下である。「夫婦のみ世帯」は、全国サンプルより若干多く、「単身」は男性より女性に多い。

本人年収（表３）は、全体の55.5%が「0～129万円」、「130～399万円」が25.1%、「400～999万円」が16.0%、「1000万円以上」が3.3%である。女性農業者の場合は、「あなたは収入のある仕事についていますか」の問いで「はい」と答えているにもかかわらず、年収「０」と13.3%が答えでいる。農業女性のunpaidworkの一端を示している。年収があると答えた女性の中でも73.4%が129万円以下にとどまっており、本人年収400～599万円がわずか１人、それ以上はゼロである。全国サンプルと比べると、農業者サンプルでは、「ゼロ」はより少ないが、129万円以下に約半数が集中しており、200～599万円の中位層、600～999万円の中の上層で全国サンプルの方がより多い（49.7%：32.3%)。この開きは、性別で男性だけを見るとさらにいっそう拡大する（78.0%：55.0%)。ただ、この農業者サンプルにおける本人年収の低さは、対象者の半数が65歳以上ということとも強く関連しているかもしれない。他方1000万円以上の収入層になると、大きな違いはみられない。後に見るように、

農業者におけるこの個人収入層は、専業農家であることと関連している。

世帯収入についても、ほぼ同じ傾向がみられる（表４）が、農業者サンプルでは、1200万円以上の収入層が、全国サンプルと比べてより多い（15.6%：9.9%）。以上のことから、農業経営が厳しい環境にありながらも、一部の農業者、農家においては、他産業従事者以上の世帯収入を確保する経済活動を展開しており、農業における２極分解が生じていることが示される。

配偶関係は、342人のうち294人が有配偶者、未婚者は8人、離死別は40人である。配偶者の仕事の種類をみると、294人中196人（66.7%%）が農業、つまりこの人々は専業農家的農業者でもある。農業以外（兼業）が76人（25.9%）、無職が22人（7.5%）である。

労働日数・労働時間については、とくに男性の間で、21日以上の労働日数を回答する人が62.5%を占めており、ほとんど毎日農作業にたずさわっている。１日の労働時間については、女性の大部分が６時間～８時間、男性の大部分が８時間～10時間に集中している。

表１　性別・年齢別構成

〔実数：人数 / 小数：％〕以下同じ

	28～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～77	計
男	1 0.6	4 2.3	8 4.6	9 5.1	20 11.4	5 2.9	18 10.3	22 12.6	34 19.4	43 24.6	11 6.3	175 100.1
女	1 0.6	3 1.8	5 3.0	4 2.4	13 7.8	19 11.4	12 7.2	27 16.2	27 16.2	36 21.6	20 12.0	167 100.2
計	2 0.6	7 2.0	13 3.8	13 3.8	33 9.6	24 7.0	30 8.8	49 14.3	61 17.8	79 23.1	31 9.1	342 99.9
NFR全体	4.1	9.7	10.0	10.1	11.6	12.7	10.7	9.6	9.7	8.3	3.5	100.0

表２　家族構成

	単身	夫婦のみ	本人夫婦と子ども	親夫婦と本人	本人と子ども	一人親と本人	三世代	その他	計
計	11 3.2	80 23.4	54 15.8	5 1.5	4 1.2	1 0.3	147 43.0	40 11.7	342 100.1
NFR全体	5.0	20.2	36.1	3.9	3.2	2	26.2	3.4	100.0

表３　性別・本人年収

		0	129下	130～199下	200～399	400～599	600～999	1000以上	計
農業者	男	2 1.2	45 26.0	20 11.6	43 24.9	34 19.7	18 10.4	11 6.4	173 100.2
	女	21 13.3	116 73.4	9 5.7	11 7.0	1 0.6	0 0	0 0	158 100.0
	計	23 6.9	161 48.6	29 8.8	54 16.3	35 10.6	18 5.4	11 3.3	331 99.9
NFR全体	男	1.4	7.8	5.3	27.1	25.9	25.0	7.5	3323
	女	21.3	44.7	9.5	15.4	5.6	2.9	0.7	3662

表４　農業者の世帯年収

		なし	100 未満	100 ～199	200 ～399	400 ～599	600 ～799	800 ～999	1000 ～1199	1200 以上	DK	
農業者	男	0	5	18	31	27	19	19	9	34	9	171
	女	1	9	15	31	23	19	12	9	18	25	162
	計	1 0.3	14 4.2	33 9.9	62 18.6	50 15.0	38 11.4	31 9.3	18 5.4	52 15.6	34 10.2	333 100.0
NFR全体		0.5	2.3	5.0	15.9	20.2	17.0	12.9	8.4	9.9	8.0	100.0

３．農業者の健康状態・抑うつ感・生活不安

（１）性別・年齢別の抑うつ的心身状態

農業はきびしいと言われる（A）。労働面も経済面も含まれていよう。主観的な健康状態は、男女とも全国サンプルに比べて「悪い」「やや悪い」と答える比率が多い。これは年齢構成の高さとも関連しているかもしれない。経済的には、上に見たように全国平均より、世帯収入においても個人収入においてもかなり低いが、他方では、一部に高収入層があり、２極分解している。経済状況とは別に、農家生活における家父長制など抑圧的な関係性がとりわけ若い世代や女性の抑うつされた心理状態を生み出すとも言われる（B）。A・Bが生活不安や抑うつ感においてどのように読み取れるかをデータから検討してみよう。表５はこの１週間の心身状態で、「週に３、４回」「ほとんど毎日」あると答えた人の比率である。

①男女ともに農業者において全国サンプルより抑うつ感が高い項目

１．気分が晴れない

２．他人と同じ能力がある（ない）

３．憂うつ感

４．めんどう感

5．先のことを積極的に考える（考えられない）

6．不満なく生活している（いない）

②農業者女性において全国サンプル女性より抑うつ感が高い項目

1．恐ろしい気持

2．眠れない

3．寂しい

③農業者男性において全国サンプル男性より抑うつ感が高い項目

1．煩わしい

2．集中できない

3．悲哀感

4．仕事手につかず

④農業者男性と比べて、農業者女性が抑うつ感が高い項目

1．煩わしい

2．気分が晴れない

3．めんどう感

4．恐ろしい気持ち

5．眠れない

6．寂しい

7．悲哀感

⑤農業者男女ともに全国サンプルと比べて抑うつ感が低い項目

1．毎日が楽しい

以上のことから、男女ともに共通する農業者の抑うつ感と、全国サンプルと比べて男女で異なる抑うつ感、農業者の男女間で異なる抑うつ感がそれぞれ存在することがわかる。

男女ともに共通する抑うつ感の特徴は「農業という仕事が能力のある人間の仕事として評価されていないのではないか」「毎日の生活はどちらかといえば楽しいが、現状の生活にやや不満があり、生活において気分が晴れず、かなり重い憂うつ感が気持ちの上を覆っており、先のこと（将来の展望）を積極的に考えられない」」という２点であろう。ここには、他の職業とは異なった農業者の職業的アイデンテイテイの混乱が見られるといってよいであろう。

農業者の男女別に見ると、男性では「仕事関連の抑うつ感」が認められるが、女性は抑うつ的な心身状況が、全国女性サンプルと比べても農業者男性と比べても多いことが示される。特に農業者男性では全国サンプル男性と比べて、「他人と同じ能力あり」が非常に落ち込んでいるのに対して、農業女性では全国女性サンプルに比べ「他人と同じ能力あり」と答える比率が高く、「毎日が楽しい」という回答もより多い。しかし一方で、農業者男性と比べると、「寂しい」「悲哀感」「眠れない」「恐ろしい」等が高い。つまり農業者女性は、

働く女性として一定の自己評価を持ちつつも、家族やその他の社会状況において、かなり広範な抑うつ的気分を抱いているということが読み取れる。

表５　この１週間の心身状態（しばしばあり出現率）の農業者の位置

サンプル・性別＼心身状態	ア 煩わしい	イ 気分が晴れない	ウ 他人と同じ能力あり	エ 憂うつ感	オ 集中できない	カ 食欲減退	キ めんどう感	ク 先のこと積極的である	ケ 恐ろしい気持ち	コ 眠れない	サ 不満なく生活している	シ 口数減少	ス 寂しい	セ 毎日が楽しい	ソ 悲哀感	タ 仕事手につかず
農業者 男性	7.7	5.4	9.0	20.0	9.9	6.0	6.6	18.6	3.6	5.3	50.9	7.2	3.6	50.9	6.0	6.6
全国ｻﾝﾌﾟﾙ 男性	6.5	4.8	25.7	10.5	8.3	5.9	8.6	22.5	3.8	7.6	51.9	7.7	5.8	43.9	4.9	4.4
農業者 女性	10.5	7.5	11.2	19.8	8.3	6.2	10.3	14.8	6.1	12.3	53.8	6.5	8.2	51.6	8.0	6.2
全国ｻﾝﾌﾟﾙ 女性	11.0	6.3	23.4	12.8	9.8	7.2	13.5	22.6	4.3	10.9	55.4	7.8	6.8	48.4	8.2	6.1

性別の抑うつ度スコアの総点との関連を見ると、有意の相関は見られなかった。しかし、「眠れない」の項目だけは、性別の有意差がみられた。

表６　この１週間の心身状態（しばしばあり出現率）の年齢別出現率

年　齢	１週間の心身状態（ＣＥＳＤ平均得点）	農業者サンプル	全国サンプル	ライフステージ
27～29	13.5000	13.4762	12.9928	壮年前期（28～39歳）
30～34	12.6667			
35～39	13.8462			
40～44	13.7692	12.8478	12.8368	壮年中期１（40～49歳）
45～49	12.4848			
50～54	12.9524	13.7000	12.3500	壮年中期２（50～59歳）
55～59	14.2414			
60～64	12.0208	12.9811	11.8300	壮年後期（60～69歳）
65～69	13.7759			
70～74	11.4459	12.2451	12.2777	老年齢期（70歳以上）
75～77	14.3571			

表６には、年齢別・ライフステージ別に、心身状態スコアを、「全くなかった＝０」、「週に１～２日＝１」、「週に３～４日＝２」「ほとんど毎日＝３」とスコアを与え、各年齢層のの平均値を農業者と全国サンプルの比較で示した。

①まず、27歳から69歳までの全てのライフステージにおいて、農業者は全国サンプルよ

りより高い抑うつ的状態にあることが示される。ただ、70～77歳の平均値はそれ以前に比べ最も低いものの、その内部をみると、70～74歳の11.4459に比べ、75～77歳では14.3579と、逆にそれ以前のどの値よりも高い抑うつスコアが示されている。この落差が何から来るのかは本調査からはわからないが、今後、農村の高齢者、特に、後期高齢者の抑うつ状態に関連して注目すべき点であろう。

②次に、全国サンプルでは、抑うつ感得点は、壮年後期（60～69歳）、つまり、勤労者の場合の退職後に最も低く、壮年前期と老年期で高くなるパターン（U字型）を示しているが、農業者サンプルはこれとかなり異なっている。20代30代で抑うつのスコアが高く、いったんそれは低下するが50代で再び高く、60代で低下、７５以上で再び上昇というように完全に「波状」を示している。このことは、「家族経営」のなかで、男女を問わず、若年層世代のおかれている家父長制的な人間関係が反映していると見ることが出来よう。

技術的に未成熟な壮年前期で抑うつは相対的に高く、親の引退期にあたる壮年中期１では低下、体力の下降しはじめる壮年中期２で抑うつ感は上昇、後継者に委譲する壮年後期で下降し、老年期にさらに下降するが、健康問題や介護問題をかかえる後期高齢期に入り急上昇というパターンが考えられよう。

（２）この１ヵ月の悩み・不安

先に、農業者男性は、「仕事関連での抑うつ感」がより高いとのべたが、家庭内での人間関係での「悩み」に関しては、「子どものこと」「配偶者のこと」「家族内での自分の負担が大きすぎる」のいずれにおいても、女性より男性の悩みは有意に低かった（表７）。「配偶者のことでこの１ヵ月悩んだ」ことがある頻度は、農業者男性は全国サンプルに比べてかなり低い。これに比べ、農業者女性の場合は、悩んだことが「何度もあった」「ときどきあった」が農業者男性の３倍以上あり、全国サンプルの女性に近い状態である（表９）。

表７　性別と悩みの相関の有意性

子どものこと	配偶者のこと	家族に理解されていない	自分の負担が大きすぎる	親・義理の親のこと
※※ -0.165	※ -0.124	-0.82	※※ -0.221	0.032

※５％水準で有意，　※※１％水準で有意（以下同じ）

「自分が家族に理解されていないと感じた」は農業者の男女間で有意な違いはなく、また、「親や・義理の親のことで悩んだ」は、拡大家族の割合が農業者で多いにもかかわらず、男女の有意な違いは見られなかった。

表８　この１カ月にあったこと（ア）子どものことで悩んだ

対象・性別＼度		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	全くなかった	計
全国サンプル	男	12.0 322	24.8 665	28.5 762	34.7 928	100.0 2677
	女	20.9 647	27.5 851	24.2 749	27.4 846	100.0 3093
農業者サンプル	男	8.3 13	23.1 36	32.1 50	36.5 57	100.0 156
	女	23.2 36	23.9 37	18.7 29	34.2 53	100.0 155

表９　性別とこの１ヵ月にあったこと（イ）配偶者のことで悩んだ

対象・性別＼頻度		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	全くなかった	計
全国サンプル	男	5.3 145	12.1 333	24.4 672	58.3 1608	100.1 2758
	女	11.8 334	20.3 576	25.8 733	42.1 1196	100.0 2839
農業者サンプル	男	2.6 4	5.8 9	26.6 41	64.9 100	99.9 154
	女	8.9 12	18.5 25	26.7 36	45.9 62	100.0 135

表１０　性別とこの１ヵ月にあったこと（エ）自分の負担が大きすぎると感じた

対象・性別＼頻度		何度もあった	ときどきあった	ごくまれにあった	全くなかった	計
全国サンプル	男	4.0 130	9.9 321	20.6 667	65.4 2115	99.9 3233
	女	12.4 439	18.2 645	26.9 955	42.6 1511	100.1 3550
農業者サンプル	男	2.4 4	13.1 22	28.0 47	56.5 95	100.0 168
	女	14.1 22	19.9 31	22.4 35	43.6 68	100.0 156

「自分の負担が大きすぎると感じた」は、全国サンプルで「何度もあった」「ときどきあった」は男性の13.6%、女性は２倍以上の30.6%と女性の方がはるかに大きい。農業者サンプルにおいても、この性別のひらきが見られるが、全国サンプルよりもさらに開きが大きく、男性の15.5%に対し、女性は34.0%に上る（表１０）。

以上から、「子どものこと」「配偶者のこと」「家庭内での自分の負担」での悩みは、農業者男性においてかなり低く、先に述べた「心身のよくうつ状態」の悪さが、農業者男性の

家族関係から来ている部分は少なく、この問題は農家では非農家よりはるかに女性の負担になっていることがわかる。

4．夫婦間の意思決定—男性優位性の様相—

配偶者間の意見の食い違いが、夫婦のどちらの意見で収束されているかをみると（表１１）、男性は５３、８％が「ほとんど自分の意見」＋「どちらかといえば自分の意見」と答え、女性は「ほとんど配偶者」＋「どちらかといえば配偶者」と４４、８％が答えている。「どちらともいえない」は男性より女性の方で多い。しかし、「妻の意見で決める」は、男女ともにほぼ１割程度にすぎない。全国サンプルに比べると、男性の決定率が高く、「どちらともいえない」という流動的なタイプもやや少ない。これからすると、農業者の夫婦においては、圧倒的な男性優位ではないものの、他の職業と比べ、男性優位性がかなり残存しているといえる。

表１１　配偶者との意思の食い違い（意思決定のパターン：性別）

		ほとんど自分の意見	どちらかと言えば自分の親	どちらとも言えない	どちらかと言えば配偶者の意見	ほとんどが配偶者の意見	合　計
NFR全体	男性	10.0	28.4	48.9	10.6	2.1	2,800 100.0
	女性	3.4	15.6	49.1	25.0	7.1	2,877 100.2
農業者	男性	23 14.7	61 39.1	57 36.5	10 6.4	5 3.2	156 99.9
	女性	8 6.0	6 4.5	60 44.8	49 36.6	11 8.2	134 100.1

5．夫婦の伴侶性の実態

木田らは、夫婦の伴侶性を夫と妻が一緒に行動する＝共同行動（C）と同じ目標に向かって支え合う行動の二次元（D）を分けている[4)]。後者は、コミュニケーションを伴いながら相互に理解し合う評価しあう相互作用である。

農業者においては共同行動は（C）、農業生産における共同行動と、生活面での共同行動とがある。もちろん、夫婦が共に農業者であっても、生産計画や生産作業、管理作業など、役割分担や責任分担・部門分担が行われている可能性もあるが、一応本データでは、配偶者も農業に従事している回答者を「生産面・共同行動グループ」と捉え、他産業従事および無職を「生産面・非共同行動グループ」と捉えることにする。

次に生活面では、ＮＦＲ調査項目中の「いっしょにとる夕食」「いっしょに買物やショッピングに行く行動」により捉える。また（D）については、配偶者からのケア行動の認知に

関する三つの問いによって見ることにする。

（1） 生産面での共同行動

配偶者の仕事の種類で述べたように、回答者中、生産面での共同行動グループは６６、７％、それ以外は３３、４％である。

（2） 生活面での共同行動

「夕食」:「ほぼ毎日一緒にとる」を５、「月に１～２日」を１として、その間を５段階でたずねているが、その平均値を見ると、「夕食」の共同行動は4.9で、全国サンプルの4.3と比べ圧倒的に高い。30代前半と40代が低くなっている以外は「ほぼ毎日」が夕食を共にする。生産面の共同行動が、生活面での日常繰り返される不可欠の行動と結びついている。「買物・ショッピング」となると、全国サンプルよりやや低くなる。「夕食」で全員が「ほぼ毎日」と答えた年齢層でも「買物やショッピング」の共同行動は、それほど多くないが、「夕食」での共同行動が少ない年齢層では「買物・ショッピング」の共同行動も非常に少ない。

表１２　農業者・年齢別配偶者との共同行動（夕食と買物）

上段：実　数
下段：平均値

年齢	28～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～75	76～77	計	全国サンプル平均値
夕食	2 5.0	2 2.0	12 5.0	11 4.1	40 3.6	22 5.0	28 4.9	45 4.8	56 4.8	66 5.0	18 5.0	302 4.5	4.3
買物	2 1.5	2 0	12 1.7	11 0.6	30 0.9	22 1.6	28 0.9	44 1.3	54 1.6	65 1.6	17 1.4	287 1.4	1.5

「ほぼ毎日」を５、「１週間に４～５日」を４、「１週間に２～３日」を３、「１週間に１日くらい」を２、「月に１～２日」を１、「ほとんどない」を０と換算して平均値を算出。

（3） 配偶者からのケア（受容・評価・助言）の認知とジェンダー

「配偶者の心配や悩みごとを聞いてくれる」ことへの認知（受容認知）は、性別によるちがいがみられず、80％以上の男女が「あてはまる」＋「どちらかといえばあてはまる」と回答している。一般にケア役割は女性が男性に与えることが期待されていると見なされるが、農業者の場合は、受容に関してジェンダーによる違いが見られない。

これに対し「能力や努力を高く評価してくれる」ことへの認知（評価認知）は、男性の方が女性より高い。男性に対する女性からのケアの特徴は「能力や努力の評価」にあるともいえる。

「サポートー助言やアドバイスをしてくれる」ことへの認知（サポートの認知）は、逆に「あてはまる」の回答で、女性の方より高い。

以上で見ると、配偶者からのケアの種類においてジェンダーによる差の傾向がやや見られるものの、統計的に有意な差ではなかった。

表１３　性別・配偶者とのかかわり（ア）心配ごとや悩みごとを聞いてくれる

			あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちからといえばあてはまらない	あてはまらない	合　計
性別	男性	度数	74	61	12	9	156
		性別の%	47.4%	39.1%	7.7%	5.8%	100.0%
	女性	度数	63	49	15	9	136
		性別の%	46.3%	36.0%	11.0%	6.6%	99.9%
合計		度数	137	110	27	18	292
		性別の%	46.9%	37.7%	9.2%	6.2%	100.0%

表１４　性別・配偶者とのかかわり（イ）能力や努力を高く評価してくれる

			あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちからといえばあてはまらない	あてはまらない	合　計
性別	男性	度数	50	77	19	9	155
		性別の%	32.3%	49.7%	12.3%	5.8%	100.1%
	女性	度数	36	57	30	10	133
		性別の%	27.1%	42.9%	22.6%	7.5%	100.1%
合計		度数	86	134	49	19	288
		性別の%	29.9%	46.5%	17.0%	6.6%	100.0%

表１５　性別・配偶者とのかかわり（ウ）助言やアドバイスをしてくれる

			あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちからといえばあてはまらない	あてはまらない	合　計
性別	男性	度数	57	73	19	7	156
		性別の%	36.5%	46.8%	12.2%	4.5%	100.0%
	女性	度数	59	46	22	7	134
		性別の%	44.0%	34.3%	16.4%	5.2%	100.0%
合計		度数	116	119	41	14	290
		性別の%	40.0%	41.0%	14.1%	4.8%	100.0%

表１６　年齢別に見た「配偶者からのケア」の認知

	39歳以下	40～49	50～59	60～69	70以上	計
(ア)心配や悩みごとを聞いてくれる	1.17	1.32	1.20	1.22	1.36	1.32
(イ)能力や努力を高く評価してくれる	1.13	1.15	1.06	0.99	1.10	1.06
(ウ)助言やアドバイスをしてくれる	1.25	1.24	1.24	1.15	1.24	1.21

年齢別にみたケアの認知の推移

それぞれの配偶者からのケアを「してくれる」を２、「どちらかといえばしてくれる」を１と計算して、各年齢層の平均値の推移をみてみる。

(a) 「受容」の認知について

40代で抜きんでて上昇しているのを除くと、壮年前期で最も低く、ライフステージが上がるにつれて上昇している。　先の「共同行動」においては、40代は、夕食も買物も共同性が農業者サンプルの中で低かったことを想起する必要がある。

(b) 「評価」の認知について

このケアの認知は、40代以下でやや高いものの、60代を底に50代以上とかなり低い。「受容」とは逆にこの年代での夕食等の共同行動は高かったにもかかわらず、評価的ケアにおいては、顕著に低滞している。

(c) 「助言・アドバイス」

このケアは60代でやや落ちるが、一貫して、持続されているケアであることが示されている。

６．夫婦の伴侶性と結婚生活満足度、抑うつ感・悩み

以上に見てきた有配偶の農業者の伴侶性（生産面での共同行動、生活面での共同行動、ならびに配偶者からのケアの認知）が、うつ的心身状態、家庭の悩み、結婚満足度とどのように関わっているかをみてみよう。また、伴侶性の一様態としての配偶者とのトラブルとこれらの要因との関係を検討する。

（１）まず、性別・年齢別に、結婚生活全体への満足度を見ると（表１７）、30代前半、60代前半以外で、すべてに男性の満足度が女性をうわまわっており、全国データと比べて、男女ともに満足度の平均値はかなり低い(全国の男性の満足度平均値3.23、女性2.94)。

表１７　性別・年令別にみた結婚生活全体との満足度

		27～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69	70～74	75～77	平均値
女性	満足度スコア	2.0	2.0	3.0	2.8	2.5	2.9	2.9	3.2	3.0	2.9	3.1	2.9
	実　数	1	1	5	4	11	16	12	24	23	26	7	
男性	満足度スコア	3.0	1.0	3.3	3.0	3.1	3.2	3.1	2.9	3.2	3.2	3.2	3.1
	実　数	1	1	7	7	19	5	15	20	30	39	10	154

かなり満足→４　どちらかといえば満足→３　どちらかといえば不満→２　不満→１　として合計を計算

結婚初期、中期において女性の結婚満足度が低い事が注目される。

（２）配偶者との満足度を、家事、育児、家計の分担や管理運営、性生活、結婚生活全体の５項目で、性別との相関を見てみると、

家事　＊＊　０．３９８

育児　＊＊　０．１６８

家計の分配や管理運営　n.s　０．１１６

性生活　n.s　—０．００５

結婚生活全体　n.s　０．１１４

であり、男性からの女性に対する家事および育児への満足度は有意に高いが、結婚生活全体への満足度に性別の有意な統計的な違いは見られない。

また、５項目相互の相関は、表１８のとおりである。

表１８　配偶者への満足度の相関係数（pearson）

	育児への満足度	家計の分配や管理・運営	性生活	結婚生活全体
配偶者への家事満足度	※※ 0.461	※※ 0.586	※※ 0.467	※※ 0.589
育児への満足度		※※ 0.467	※※ 0.430	※※ 0.487
家計の分配や運営・管理			※※ 0.537	※※ 0.644
性生活				※※ 0.714
結婚生活全体				

（３）結婚生活全体への満足度と共同行動

生産における夫婦の共同行動は、抑うつ度および結婚生活全体の満足度に有意な相関をもっていなかった。

ただ、この共同行動は「世帯収入と」有意に相関していた。つまり、専業農家で高所得を目指すには、現状では、兼業よりも（やり方次第だが）、専業で結果が出ているということである。生活面で夕食における共同行動は、満足度と有意に相関しているが、買い物の共同行動は相関していない。都市の家族にとって、家族は消費の単位であり、共同行動としての意味が大きいかもしれないが、農家では、生産面が大きいのであろう。

（４）配偶者からのケアの認知と結婚生活全体の満足度との相関

表１９に見るように、結婚生活全体への満足度は、配偶者からのケアの認知と相関が高い。また、夕食を一緒にとることも満足度と相関しているが、ケアの認知と満足度との関係の方がはるかに高い（表１９、２０）。また、夕食を一緒にとることと、ケア行動の認知には有意の相関がえられた（表２１）。

表１９　結婚生活全体の満足度と配偶者からのケアの相関係数

配偶者からのケア ＼ 満足度	心配ごとや悩みを聞いてくれる	能力や努力を高く評価してくれる	助言やアドバイスをしてくれる
結婚生活全体への満足度	※※ 0.368	※※ 0.404	※※ 0.367

表２０　結婚生活全体の満足度と共同行動の相関（pearson）

共同行動 ＼ 満足度	夕　食	買　物
結婚生活全体への満足度	※※ 0.160	0.088

表２１　配偶者との共同行動と配偶者からのケアの相関（pearson）

配偶者からのケア ＼ 共同行動	心配ごとや悩みを聞いてくれる	能力や努力を高く評価してくれる	助言やアドバイスをしてくれる
夕　食	※※ 0.189	※※ 0.159	※※ 0.171

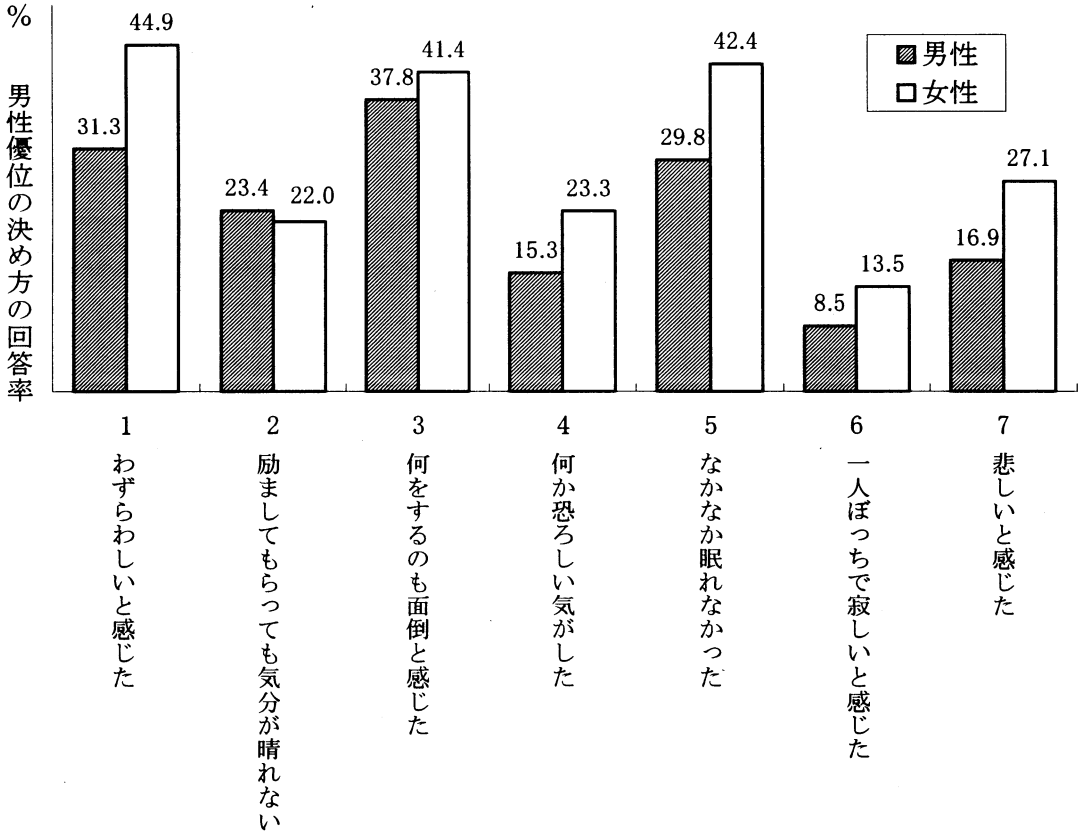
配偶者とのトラブルの有無と、配偶者への満足度（５つの項目）、１ヶ月の悩み、抑うつの諸項目の関係を分析した結果、次の項目との有意の相関の結果がえられた。

配偶者とのトラブルの有無 ⇨	配偶者への満足度	１．家事	−0.152※
		２．家計管理	−0.126※
		３．性生活	−0.213※※
		４．結婚生活	−0.255※※
	１ヶ月の悩み	１．子どものこと	0.186※※
		２．配偶者のこと	0.343※※
		３．親・義理の親	0.173※※
		４．家族で理解されていない	0.359※※
		５．自分の負担大	0.210※※
		６．職場や仕事で理解されていない	0.186※※
	抑うつ	１．わずらわしい	−0.117※
		２．ゆううつ	−0.200※
		３．集中力がない	−0.203※※
		４．かなしい	−0.141※
		５．口数が少くなった	−0.279※※
		６．恐ろしい	−0.167※
		７．眠れない	−0.151※
		８．他人と同じ能力があると思った	−0.121※

（５）意思決定における男性優位性と抑うつ度、家庭の悩みおよび結婚生活満足度

表２３は、抑うつ度の総点を２５％ずつの４分割の層にわけた時の、夫婦間の意見の食い違いの収束パタンを性別にクロスさせたものである（抑うつ度の分布からは未婚者、離・死別者は除外）。結果は必ずしも単純ではなく興味深い。一つは女性の間で、男性中心の決定パタンにある人は第４分位の高い抑うつ度を持つ人が相対的に少なく（１６、７％）、むしろ女性中心や「どちらとも言えない」層でより多いこと。男性では、この分位の高い抑うつ度をもつ人は、「女性配偶者の意思決定パタン」でより多い（４０％）こと（表２３）。このことは、農家において、生産や生活の共同行動場面が圧倒的に多い夫婦関係のなかで、社会規範としては「男性中心」であっても、現実の夫婦の能力差によって女性が決定せざるをえない場面は非農家より多く発生すると考えられ、これがパタン化するとき、男性の抑うつ度に関係してくるのではないかと推論される。表２２は、意思決定の男性優位性がいくつかの項目で女性の重い抑うつと関連することを示す。

表２２　男性優位の決め方と答えた人の抑うつ度の関係（性別）



この一週間の心身の状態（抑うつ度）と、男性中心の意思決定。
夫婦の意思が食い違った場合、「夫中心に決める」と回答した人のうちで、７項目に対して「全くなかった」以外の回答者の比率の合計

表２３　意思決定のパタンと抑うつ（性別）　　―― 男性優位の決め方

性別	決定の型	抑うつスコア４分割の各グループ				合　計
		低25%	低 25～50%	高 50～75%	高 75～100%	
男性	夫　中　心	30 35.7	19 22.6	22 26.2	13 15.5	84 100.0
	どちらともいえない	17 29.8	13 22.8	15 26.3	12 21.1	57 100.0
	妻　中　心	4 26.7	1 6.7	4 26.7	6 40.0	15 100.1
女性	妻　中　心	2 14.3	3 21.4	5 35.7	4 28.6	14 100.0
	どちらともいえない	16 26.7	10 16.7	17 28.3	17 28.3	60 100.0
	夫　中　心	12 20.0	16 26.7	22 36.7	10 16.7	60 100.1

しかし、家庭内の悩みと意思決定のパタンの関係をみると、「配偶者のこと」「自分が家族に理解されていない」「自分の負担が大きいと感じる」の項目について、女性は男性中心の意思決定パタンのなかで、それ以外のパタンより大きな悩みを感じている。

７．まとめ

以上に、農業者の抑うつ度や家庭の悩み、家族関係の満足度を、夫婦の伴侶性と意思決定の男性優位性との相関において、ＮＦＲデータを検討した。それらの検討から次のような結果を得た。

①生産面での共同行動は世帯収入の向上に関係するが、結婚生活満足度や生活面の夫婦の伴侶性とは関係していない。

②生活面での共同行動（夕食）は、夫婦間のケア行動の認知と相関し、また、全体としての結婚満足度とも相関している。結婚満足度は、日々の共同行動を行うことでも形成されるが、さらに配偶者からのケア行動という特別なコミットメントがあることが重要であり、これがあるという認知に満足度はより強く相関している。

③配偶者間のケア行動の認知は「受容的ケア」は性差がほとんど見られず、「評価的ケア」でやや男性に対するもの、「助言・アドバイス」に女性に対するものとの傾向が見られたが、カイ二乗検定結果は有意ではなかった。

④全体としての結婚満足度は、男女ともに全国サンプルと比べて低く、さらに「抑うつ度」の総スコアの高さと相関していた。また抑うつ度は「配偶者への家事満足度」「育児への満足度」と相関していた。農業者は、男性の家事参加がある程度見られたが、これを含めながらも性別役割にもとずいてまだ女性が大部分を行っている家事・育児への満足度が、全体としての結婚満足度に貢献しているのである。家事を誰が担当するかも重要であるが、日常生活の基本的ニーズがスムーズに満たされることはさらに重要なのだと考えられる。

⑤配偶者間のトラブルは、受容や評価的なケア行動、全体としての結婚満足度、家事の満足度、家計管理および性生活の満足度と負の相関を示した。また、「悲しい」「口数少ない」「恐ろしい」「ねむれない」「わずらわしい」「憂うつ」「集中できない」などの抑うつ状態と相関していた。

今回の分析では、２変数間の関係性のみを取り扱ったが、今後、諸変数の全体としての相互関連性を考察していくことにより、農業者の夫婦関係と他の職業の夫婦との共通性や違いを明らかにしていきたい。

（本稿で用いたＮＦＲ全国サンプルデータは、参考文献５に掲げた報告書による）

参考文献

１）光岡浩二, 1996, 『農村家族の結婚難と高齢者問題』, ミネルヴァ書房

２）篠崎正美, 1998, 「家族経営協定のジェンダー分析（２）」, 熊本学園大学社会関係学会『社会関係研究』４巻１号

３）農林統計協会, 2000, 『図説食料・農業・農村白書平成１１年版』, 農林統計協会

４）宮下美智子、木田淳子, 1986, 『家庭生活における夫婦の共同―分離（１）―中年夫婦の共同－分離の実態―』, 『大阪教育大学紀要』第Ⅱ部門第３５巻第１号

木田淳子, 1986, 「家庭生活における夫婦の共同―分離（２）―中年夫婦の共同―分離と「相互の理解」―」, 『大阪教育大学紀要』第Ⅱ部門第３５巻第２号

木田淳子, 1987, 「家庭生活における夫婦の共同―分離（３）―中年夫婦のコミュニケーションと夫婦間の理解―」『大阪教育大学紀要』第Ⅱ部門第３６巻第２号

木田淳子, 1988, 「都市家族における夫婦観―若年夫婦と中年夫婦を対象に―」大阪教育大学家政学研究会『生活文化』３１

木田淳子, 1994, 『家族論の地平を拓く』, あゆみ出版

５）日本家族社会学会全国家族調査（ＮＦＲ）研究会, 2000, 『家族生活についての全国調査』（ＮＦＲ９８）, Ｎｏ．１

文部省科学研究費基盤研究（A）：10301010
家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No.2-3

現代日本の夫婦関係

Marital Relations in Contemporary Japan

岩 井 紀 子 編

2001 年 6 月

日本家族社会学会
全国家族調査（NFR）研究会